

2011年3月13日 浦賀教会主日礼拝説教

安息日の主のことば (ルカ13章10-17節)

《礼拝する私ども》

大きな災害がありました。今もなお、地震は続き、私どもの町も注意報の中に置かれ、そのことを決して忘れてはいけない状況にあります。連合長老会、あるいは改革長老教会協議会の、私どもの仲間の教会の牧師たちが、インターネットを通じて、震災の中にある諸教会の状況を知らせてくれています。多くの人々の命が奪われています。でも心配していた牧師の無事も知らされました。

私どもの信仰が問われる時だと思います。現地の牧師たちが記していたこと。それは明日の、つまり今日の礼拝だけということです。今日、私どもは、私ども自身も、現地に及びもつかないながらも、自らが、地震と津波のことに心を配りながら、なお私どもの教会に集い礼拝を守っています。なお大きな災害のまなかにある人々も、今、時をまったく同じにして、礼拝を守っているのです。神さまに向かい、神さまの前に立ち、神さまを賛美し祈っています。

宮城、岩手、福島ほか、多くの被災の中にある方々。なぜこのような災害が。なぜこのような大きな被害が。なぜ多くの人々の命が。なぜ愛する私の家族が。その思いは、私どもも抱くものであります。現地の先生方、信徒の方々、そして私ども、今、共に礼拝の中で御言葉を求め、祈っています。

ちょうど一年前に、ここでお話ししましたことを思い出さないとはいられません。それはまた、16年前に、私の出身教会の礼拝に呼ばれ、講壇を守りました時のことを思い出さないとはいられませぬ。ちょうど、神戸の震災直後の礼拝でありました。神戸からは遠くないとはいえ、大きな被害を免れながらも、暗くなってしまっていた礼拝堂で、私どもの良く知っている「アーメン」という言葉について語る準備をしていたのであります。

震災直後の新聞の記事に。私どものかけがえのない生活、命について記し。それを一瞬のうちに停止させ、打ち砕いてしまう力の恐ろしさを言って。「まったく、不条理としか言いようがない」▼「一夜にして、すべて灰燼に帰した。...この世の無常を感じさせた...」条理とは、物事の筋道。それが通っていることを言う言葉であるそうです。し

かしそれが通っていない。この世は、この世界は無常である。

この言葉に対峙しますと。私どもは正反対のところに立っています。神さまの示された道に立っているからです。この世は無常で、道が通っていないという声に逆らい、神さまが導いて下さる道に立っているからです。

今、あらためて、限られた機会ですが、私どもに与えられている信仰問答の言葉を学ぶ時間が与えられています。昨年一年間、私どもの礼拝の中での歩みでもありました。その最後の言葉が「アーメン」という小さな言葉であったのです。不条理。無常という、この世界の声。しかしそうではない。そうではないというのが、昨年度一年間味わった信仰問答書が私どもに教えるところであったのです。

『わたしたちは、あらゆる不遇の中においても、忍耐深くあるのです。幸福の中にあってはそれに感謝し、未来のことについては、父なる神様に、よく信頼する。そして、もはや、いかなる被造物も、わたしたちを、神の愛から、離れさせることはできないようになる』(ハイデルベルク信仰問答)。神様の愛から切り離されないことです。災いも、何によってさえも、イエス・キリストとともにある人生を送る人は、神様の愛から離されることはあり得ない。それが人間を支える、励ます、慰めとなる、それが、私どもに与えられた言葉です。私どもが「アーメン」と応えるとき、確かなことであるという確信、ひとりの人に止まらない、教会全体の確信が信頼が言い表されている。今、不自由な中で礼拝を守っているすべての方々と共に、私どももアーメンと口にするのであります。

《礼拝の中で》

新聞記事の中にあつた条理という語の条という字は、枝の先の末端のことを意味する言葉であるそうです。つまり不条理とは枝の先々がうまくつながっていないという言葉だということです。不思議に思いました。私どもはキリストという木の枝であると自らを言いあらわしているからです。そしてその枝が先々までつながり、決してキリストから切り離されないと信じているからです。そしてたった今、私どもは礼拝の中で転入会式を執り行い、ヨハネによる福音書から、主キリストの「私はまことのぶどうの木」との言葉を聞いたのです。「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」との言葉を聞いたのです。私どもはキリストという木の枝。その枝はキリストとしっかりつながっているのであります。大きな災害に心を配りつつも、私どもが礼拝に集うのは、そこにあるからだと思えます。イエス様が礼拝に来ておられる。イエス様が私どもと共に祈

って下さっている。

ただ今読まれた聖書の箇所は、まさに、そのような出来事でありました。イエス様御自身が、安息日の礼拝でお語りになっておられたのです。一人の女性がいました。

そこに、十八年間も病の霊に取りつかれている女がいた。腰が曲がったまま、どうしても伸ばすことができなかった。(ルカによる福音書第13章11節)

一人の女性が礼拝の中にいたのです。18年間。腰の病です。曲がったまま、どうしても伸ばすことができなかった。この女性は18年間、ひたすら礼拝に出て、神さまに祈っていたに違いないのです。神さまに助けを求めていたに違いない。まわりの人は同情したのだろうか。治るはずがないとそう思っていたかもしれない。腰が曲がった女性です。礼拝堂の片隅で、目につきにくい、誰も気かけなかった。そういう女性であったかもしれない。しかし、イエス様はその女性をご覧になった。そしておよび寄せになったのです。

イエスはその女を見て呼び寄せ、「婦人よ、病気は治った」と言って、その上に手を置かれた。女は、たちどころに腰がまっすぐになり、神を賛美した。
(同12、13節)

イエス様はひとこと声をおかけになります。「婦人よ、病気は治った。」「婦人よ」の言葉は、結婚している女性を言う言葉であるともされます。少なくとも、もう若い人ではなかったのです。しかも体が曲がっているのですから、どれだけ、その礼拝堂の中で小さい存在であったかと思うのです。でもイエス様をご覧くださった。「病気は治った。」その通りに訳される言葉であります。ですが、「病気」の語は、弱さを言う語であります。聖書で頻繁に使われる、「力(デュナミス)」という語の反対語であります。そして体が弱いことから、病気なのであります。そして「治った」の語は、解き放たれたという語であります。人間の弱さから、イエス様が解き放って下さる。弱さ、病から、イエス様が解放して下さるのであります。これほどの力。喜びはありません。女性は、たちどころに腰がまっすぐになり、神さまを賛美した。そう記されている通りです。

《18年間も苦しんでいたのに》

ゴルヴィツァーが次のように記しています(「神の喜び」155頁)。「神の御国は喜び。律法による義は喜びがないということです。一人の女性が――イエス様によって見つめられた。この女性には、もしかしたらイエス様は見えなかったかもしれない。い

ずれにせよ彼女から、願い求める声は出されなかったのである。もしかしたらそれが、会堂長の考えに沿ってのことだったのかもしれない。『いやされるのは明日以降だと。』18年間も苦しんでいたのに。」そのような気持ちで礼拝に出ていたのです。その日に自分がいやされることは決してない。そういう毎週の礼拝であったのです。「しかしイエス様が動いて下さる。御言葉の力を通して。それだけで十分であるのに。この女性の上に手を置いて下さる。御業を通して下さる。ただちに発せられた神さまに向けられた賛美の言葉は…イエス様の御業に対してもっともふさわしいものであったろう。しかし、会堂長がイエス様の御業に見たのは、神の御業ではなく、厳密な、安息日における医療の手続きだったのである。」

《礼拝の中で、人々の反応》

礼拝には必ずしも喜びだけがあったわけではなかったのであります。

ところが会堂長は、イエスが安息日に病人をいやされたことに腹を立て、群衆に言った。「働くべき日は六日ある。その間に来て治してもらおうがよい。安息日はいけない。」しかし、主は彼に答えて言われた。「偽善者たちよ、あなたたちはだれでも、安息日にも牛やろばを飼い葉桶から解いて、水を飲ませに引いて行くではないか。この女はアブラハムの娘なのに、十八年もの間サタンに縛られていたのだ。安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったのか。」こう言われると、反対者は皆恥じ入ったが、群衆はこぞって、イエスがなされた数々のすばらしい行いを見て喜んだ。(同14-17節)

会堂長です。その礼拝堂を管理し治める。いわば礼拝を取り仕切る人が、腹を立てたのです。文句を言ったのです。安息日はいけない。イエス様がいやす仕事に働く日は六日あるではないか。今日は安息日だ。休まなければいけない。そう腹を立て。しかも群衆に言ったというわけですから。神さまの御言葉を語られていたのはイエス様であったわけですから。この場面は、礼拝の中で、その礼拝を仕切る人が、もしかしたら立ち上がって、説教者に対して、それは違う、間違っていると、大きな声で申し述べたわけがあります。

これは私どもの礼拝で考えますと、異様な状況です。礼拝が中断され、説教者に対して、あなたは間違っていると申し述べられるのですから。もちろんありうることです。もし礼拝で、神さまがたたえられないなら、神さまに逆らった言葉が語られるならば、この教会の長老たち、また講壇を守る責任を与えられている牧師は、それを食い止めた

ければいけないのです。でも語られるのはイエス様であります。

《まことの礼拝》

「働くべき日は六日ある。その間に来て治してもらおうがよい。安息日はいけない。」そう声を大にした、会堂長に対して、そして、その会堂長が宣言した群衆に対して、イエス様は、「偽善者たちよ」とお答えになります。文字通りです。善いことを行うふりをして良しとしている人々たちよとお叱りになるのです。安息日でも家畜に水を飲ませても良い、そういう抜け道的な規則はつくられていたのです。マタイによる福音書にも、安息日の癒しについてのイエス様との問答があります。

…「あなたたちのうち、だれか羊を一匹持っていて、それが安息日に穴に落ちた場合、手で引き上げてやらない者がいるだろうか。人間は羊よりもはるかに大切なものだ。だから、安息日に善いことをするのは許されている。」(マタイによる福音書第12章11-12節)

このマタイによる福音書では、このことが、イエス様をどうやって殺そうかという議論にまで発展していくことを記すほどなのです。イエス様はおっしゃいます。この女はアブラハムの娘である。しばらくすれば出て参ります。あのザアカイにもアブラハムの子と呼びかけられました。信仰の子どもたち。神さまがお憐れみにならないはずがないのです。一八年もの間、つらい病に縛られていた。

安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったのか。(ルカによる福音書第13章16節)

この「安息日であっても」の語、これは「安息日だからこそ」と訳しても良いという意見があるようです。安息日だからこそ、一八年もの病の束縛から解いてやるべきではなかったのか。「安息日は神さまに栄光を帰す日。病に、縄目にしばられている人を放つ日なのである！」

《不協和音》

こう言われると、反対者は皆恥じ入ったが、群衆はこぞって、イエスがなされた数々のすばらしい行いを見て喜んだ。(同17節)

安息日はいけない、という会堂長の宣言に聞いた人々の恥じ入りと、逆にイエス様の癒しのみわざを、すばらしい行いとして喜ぶ群衆。私は、そこにすでに、おだやかならざるものを見ないではいられないのです。礼拝をつかさどる人々を恥じ入らせ、そして逆に、イエス様を喜ぶ群衆たち。それがいつしかひとつになって、イエス様を「十字架につけよ」と叫ぶ群衆に変わっていくのですから。だからこそ今日の聖書箇所が、明らかに間違った理解の後ろ盾になってしまうことがあることを、申し上げないではいられないのです。安息日に癒しをが、いつしか、安息日である日曜日の主の日に、癒しを求めている人がいるのならば、礼拝になんて行っているひまはない。そういった誤った主張に用いかねられない危険があることを心にとめなければならないのです。

そのような言葉の中で、今、災害の被災地の牧師たちが、今日、今の礼拝のために、心をくだしていることを思い起こしていただきたいのです。イエス様がお語りになったのは礼拝です。イエス様がお癒しになり、この女性が神さまを賛美したのは礼拝です。イエス様の出来事を取り上げて、礼拝をおろそかにする後ろ盾になどしてはいけません。

《祈りとともに》

加藤常昭先生が今日の聖書の箇所についておっしゃっています。「主イエスはただこの人だけを救うためにここにおられるのではない。礼拝全体を、安息日の礼拝全体を救い取るためにここにいてくださるのです。救われるべき者は、この女性であるよりも、むしろ会堂司であり、会衆でありました」（講解説教ルカによる福音書3、152頁）。

私どもは先生が、神戸の震災の後に語られた説教も読むことができます。「今日、大地が揺れ動いたら人間はどんなに脆いかということを体験し、そこから私どものところが衝き崩されるような日々を過ごしている。そこで私どもは、再建という言葉で…用い…しかし、まさにそこで、同時に…教会が伝道に励んだ初心に戻ることをも求められている…」(ヨハネ5、27頁)。

祈りを共にしたいと願います。被災地において今この時礼拝が守られ、御言葉が語られ、祈りがささげられているのです。一人でも多くの命が守られることを。そして私どもに出来ることが神さまによって示されますように。